

無料立ち読み版

陶芸教室が自宅に！

初心者のための、本格陶芸講座



序章 陶芸 基礎の基礎

序章 陶芸 基礎の基礎	7
伊藤先生と陶芸の出会いとは？	8
どんな点に魅力を感じられたのでしょうか？	8
仕事にしようと思ったきっかけとプロセスは？	8
伊藤先生の生徒さんはどのように陶芸を楽しんでいますか？	9
そもそもオープン陶芸って何でしょうか？	10
オープン陶芸の特徴と魅力は？	10
オープン陶土について教えてください。	11
専用のコート剤と着色剤について教えてください。	14
オープン陶芸を始めるにあたって必要なアイテムは？	15
あると便利なオススメアイテムは？	18
オープン陶芸の基本プロセス	19
手びねりのいろいろ	20
ロクロ成形とは？	21
成形に使う「ドベ」とは？	21
乾燥の注意点	22
装飾のいろいろ	23
焼成の基本.....	25
食器として使用する作品にはコーティングが必要	27
オープン陶芸をするにあたっての注意点	28
オープン陶芸作品を使うにあたっての注意点.....	29
本講座をどのように使われたら長く楽しんで続けられますか？	30
第1章 記念すべき初めての陶芸は湯呑み	31
湯呑みづくりの基本工程	33
玉作りとはどんな技法？	33

序章 陶芸 基礎の基礎

使用する道具・材料.....	34
手順.....	35
初心者が失敗しやすいポイントは？.....	43
アレンジを加えるなら.....	44
第1章まとめ.....	44
第2章 炊きたてのご飯が一段と美味しく感じる飯椀づくり.....	45
湯呑みづくりの基本工程.....	47
水引きとはどんな技法？.....	47
使用する道具・材料.....	48
手順.....	49
初心者が失敗しやすいポイントは？.....	59
アレンジを加えるなら.....	60
第2章まとめ.....	60
第3章 お気に入りのマグカップでほっと一息.....	61
マグカップづくりの基本工程.....	63
タタラ作りとはどんな技法？.....	63
使用する道具・材料.....	64
手順.....	65
初心者が失敗しやすいポイントは？.....	80
アレンジを加えるなら.....	81
第3章まとめ.....	81
第4章 植木鉢を作って植物に囲まれた生活はいかが？.....	83
植木鉢づくりの基本工程.....	85
ひも作りとはどんな技法？.....	85
使用する道具・材料.....	86

序章 陶芸 基礎の基礎

手順.....	87
初心者が失敗しやすいポイントは？.....	99
アレンジを加えるなら.....	100
第4章まとめ.....	100
第5章 オリジナル花器でフラワーアレンジを.....	101
花器づくりの基本工程.....	103
象嵌とはどんな技法？.....	103
使用する道具・材料.....	104
手順.....	105
初心者が失敗しやすいポイントは？.....	115
アレンジを加えるなら.....	116
第5章まとめ.....	116
第6章 アロマキャンドルで香りに囲まれる.....	117
キャンドルスタンドづくりの基本工程.....	119
タタラ作りとはどんな技法？.....	119
使用する道具・材料.....	120
手順.....	121
初心者が失敗しやすいポイントは？.....	131
アレンジを加えるなら.....	132
第6章まとめ.....	132
第7章 食卓でいつも活躍する大鉢.....	133
大鉢づくりの基本工程.....	135
練り込みとはどんな技法？.....	135
使用する道具・材料.....	136
手順.....	137

序章 陶芸 基礎の基礎

初心者が失敗しやすいポイントは？	148
アレンジを加えるなら.....	149
第7章まとめ	149
第8章 お手製のコーヒーカップでおもてなしを	151
コーヒーカップ&ソーサーづくりの基本工程	153
電動ロクロ作りとはどんな技法？	153
使用する道具・材料	154
手順	155
初心者が失敗しやすいポイントは？	171
アレンジを加えるなら.....	172
第8章まとめ	172
第9章 憧れの電動ロクロで大皿づくりに挑戦.....	173
大皿づくりの基本工程.....	175
電動ロクロ作りとはどんな技法？	175
使用する道具・材料	176
手順	177
初心者が失敗しやすいポイントは？	188
アレンジを加えるなら.....	189
第9章まとめ	189
第10章 余った土も有効活用して作品づくり	191
小皿づくりの基本工程.....	194
使用する道具・材料	195
手順	196
箸置きづくりの基本工程.....	202
使用する道具・材料	202

序章 陶芸 基礎の基礎

手順.....	203
箸置きの基本工程.....	209
使用する道具・材料.....	209
手順.....	210
第10章まとめ.....	213
終章 さらに陶芸の世界を楽しむには？.....	215
陶芸の上級レベルになると、どんなことができるようになりますか？.....	216
さらに上達していくためにどんな事に取り組めばいいのでしょうか。.....	217
伊藤先生はどのように上達してきたのでしょうか.....	218
伊藤先生は作品のデザインをどのように作り上げるのですか.....	218
今まで見てきた中で上達が早い人と遅い人との違いは？.....	219
陶芸を取り入れたオススメのライフスタイルは？.....	220
応援メッセージ.....	221
著作権について.....	222
使用許諾契約書.....	222



序章



陶芸 基礎の基礎

伊藤先生と陶芸の出会いとは？

大学時代に、本格的に学び始めました。

美術を学んでいた私が、陶芸を専攻したのは大学2年生のときでした。そこで陶芸の難しさと奥の深さを改めて知り、以後大学院卒業まで専門的な勉強をしました。当時は主に、電動ロクロを使った作品が多く、大きな壺や皿を焼き上げることに夢中になっていたように思います。

どんな点に魅力を感じられたのでしょうか？

学べば学ぶほど新しい発見があります。

勉強し始めたばかりの頃は、自分の力で土練りから焼き上げまで出来ることが単純に面白く、ただの土だったものを様々な形に作りあげられる陶芸は素晴らしい工芸だなと思っていました。やがて経験を積むうちに今度は、産地ごとに土や釉薬に違いがあることに興味を持つようになり、各地の窯を訪れる楽しさにも目覚めました。もちろん今も勉強は続いています。美術館やギャラリーに足を運び、世界各地の陶芸作品を鑑賞して、気づきを得ることも多いです。

仕事にしようと思ったきっかけとプロセスは？

大学卒業後は作品制作をメインに活動していました。



大学院卒業後も、作品制作に打ち込み、ギャラリーに出品させて頂いていました。その他にも、教室の講師を務めたり、陶芸関連の書籍づくりに関わることもありました。他の仕事に就く機会がなく、気づいたら現在に至るという感じです。現在は茨城県の笠間を拠点に、都内での講師活動を続けながら作品制作に取り組んでいます。

伊藤先生の生徒さんはどのように陶芸を楽しんでいますか？

陶芸はその他の趣味とも相性がよいようです。

陶芸は定年後に始められる方も多いクラフトのひとつです。私の生徒さんの中にも20代、30代から学び始めた方もたくさんいます。年齢に関係なく親しめま
すし、学び始めると発見の連続。その奥の深さに魅了されると、一生モノの趣
味になること間違いなしです。また、お料理や園芸の趣味とあわせて楽しめる
のもよいところですね。

皆さんこんな風を楽しんでいます！

Aさん(20代前半)

お仕事帰りに陶芸教室に通われているAさん。お休みの日にはお気に入りの陶芸作家さんの個展や気になるギャラリーを見てまわっているそうです。陶芸を習い始めたことで食器にも興味が湧き、おのずとお料理にも関心を持つようになったとのこと。

Bさん(60代)

ご主人の退職をきっかけに、ご夫婦揃って陶芸教室に通われるようになりました。今では毎年お二人の陶芸作品を写真に納め、それを年賀状にして新年のご挨拶をされるのが恒例とのこと。陶芸が夫婦円満の秘訣だそうです。

Cさん(70代)

小さな器からつくり初めて、だんだん大きな作品に挑戦。最近では、植木鉢をつくるのに凝っていらっしゃいます。園芸にも興味を持ち、自作の植木鉢で花を育てるのがとても楽しいそうです。植える植物に合わせて、鉢の形や装飾を考えているのだとか。



そもそもオープン陶芸って何でしょうか？

専用の粘土で成形したものを家庭用オーブンで焼きあげる陶芸です。

1981年に株式会社ヤコが開発したオープン陶土。これを用いた陶芸をオープン陶芸と言います。

本陶芸では1250度を超す熱を発生させる事ができるような専用の窯を必要としますが、オープン陶芸はその名の通り家庭用のオーブンを使って焼きあげる事ができる、とても手軽な陶芸です。

オープン陶芸の特徴と魅力は？

家庭用オーブンで焼くことができる手軽さが一番の魅力です。

- 専用窯ではなく家庭用オーブンで焼くことができます。
- 実用強度がある作品をつくれます。
- 練る必要がなく、開封後すぐに成形作業に取り組みます。
- 本陶芸と同じ手法が使えます。
- コート剤を塗ることで食器として使えます。
- 藍やアクリル絵の具で着色できます。

ロクロも使えるオープン陶土は、本陶芸のコツを掴むトレーニングとしても役立ちます。土に馴染み、陶芸の楽しさや奥深さを知るよい機会となること間違いナシです。

オープン陶芸は、小さなお子様からご高齢の方まで楽しめるクラフトですが、焼き上がったばかりの作品は大変熱くなりますから、取り扱いには十分注意しましょう。

オープン陶土について教えてください。

練らずに使えるのが魅力。混ぜ合わせることも可能です。



本書で使用している粘土はすべて、株式会社ヤコの「オープン陶土」です。この粘土は1981年に開発された、世界初の「家庭用オーブンで焼成できる」粘土。練らずに使えること、焼き上げ後に成形が可能なのが特徴です。焼き上がった陶器は実用強度があり、コート剤を使用すれば食器として使うこともできます。



- アクリル絵の具で着色が可能です。
- 「エコ」以外の粘土は混ぜて使えます。

序章 陶芸 基礎の基礎



オープン陶土「工作用」 素朴な素焼きを思わせる焼き上がり。



オープン陶土「紅陶」 洋風の器をイメージさせるような独特の色合い。



オープン陶土「黒木節」 渋い色合いが器づくりに重宝。



オープン陶土「ろくろ」 電動ろくろでも使え、本陶土に近い手触り。

序章 陶芸 基礎の基礎



オープン陶土「ECO」 土に埋めると1年ほどで土に戻るエコ粘土

■粘土が余ったら……



余った粘土は、濡れたタオルなどで包み、ビニール袋等で密封すれば保存可能です。固くなってしまった場合は、1cmくらいの厚さにカットし水にくぐらせた後、タオルで包んでビニール袋に入れて2~3日置いておくと、もとのように柔らかくなります。

専用のコート剤と着色剤について教えてください。

ヤコ社のオープン陶土用の釉薬や藍風の着色剤が使えます。



防水・耐油コート剤【YU~】

食器として水や食品を入れて扱うものに、防水加工を施します。作品を焼成後に筆などで塗布し、120℃で20分ほど焼きつけます。光沢があるのでニスとしても使用可能。



化粧土【白】

成分が土なので、陶土と同じ温度で焼くことができる着色剤です。絵具にはない荒い粒子がアクセントになります。掻き落としや象嵌に使えます。アクリル絵の具彩色の下地としてもオススメ。

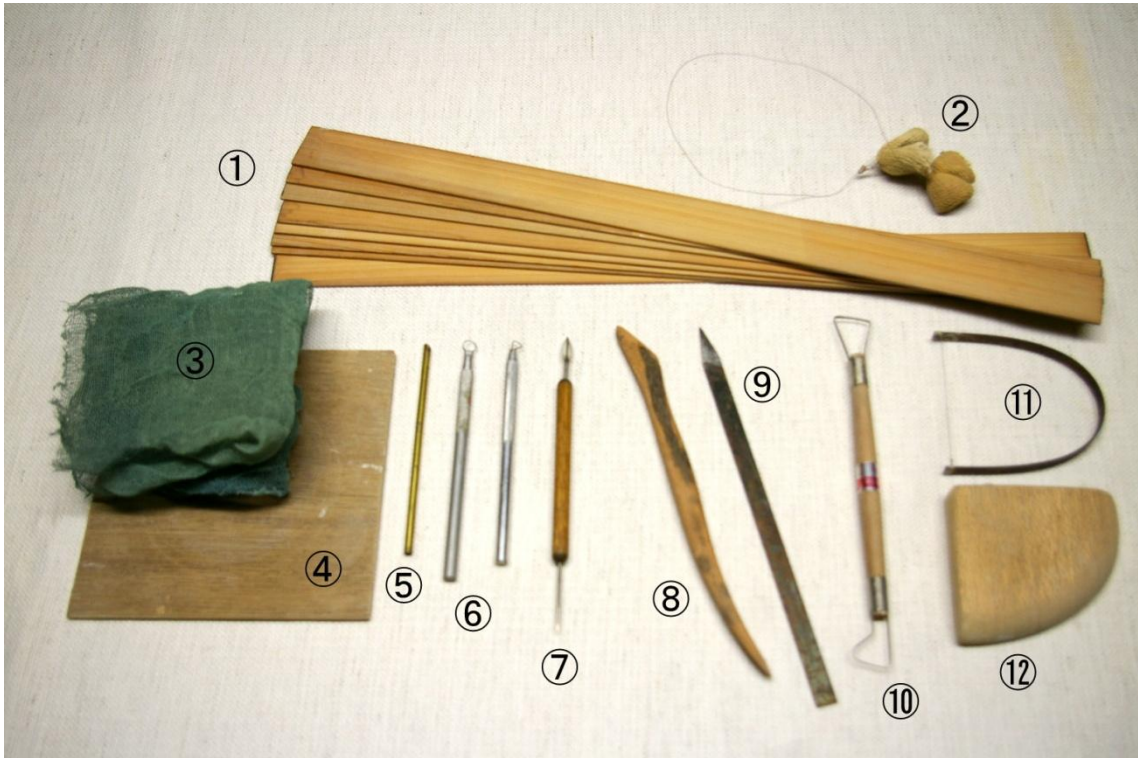


着色剤【藍 Yu~】

鮮やかに発色する藍色の着色剤。絵付けに最適。食器に使用する事もできます。沈殿しやすいので、使用前によく混ぜましょう。

オープン陶芸を始めるにあたって必要なアイテムは？

本陶芸と同じものを使います。身近なもので代用してもOK。



①タタラ板



粘土を均一に延ばし板状にしてから作品をつくる「タタラづくり」に欠かせない道具。

厚さ 2mmと5mmのものを数枚ずつ揃えておくと便利です。

ホームセンターで丁度いい厚さの板を使いやすいサイズにカットしてもらうのもよいでしょう。

②ワイヤー

おもに粘土を切ることに使用します。タタラを切ったり、ロクロから作品を切り離すのに使われます。自作する際は、ワイヤーの両端に持ち手をつければ完成です。



③かや

陶土を型にはめる際などに使用します。
布目を作品の表面に押し付けて、凹凸のある模様をつくることにも。
ガーゼでも代用可能です。

④板

作業台にしたり、完成前の作品を乗せて持ち運んだり、1枚あると便利です。板の大きさや厚さはつくるものに合わせてください。薄すぎると作品の重さでしなってしまうことも。



⑤ポンス

主に、粘土に一定の穴をあけることに使用します。
口径の大きさはいろいろ。用途に応じて使い分けます。



⑥カンナ 小

しのぎや装飾に用います。
先端は丸型や三角型など種類があるので用途によって使い分けましょう。

⑦ハリ

搔き落としなどの装飾、タタラ板の切断やしるし付けに使用します。



⑧木ベラ

手びねりやたたらづくりをする際、成形を助ける道具です。木製のヘラは粘土が付着しにくいので扱いやすくオススメです。

⑨剣先

粘土を切るのに使います。カッターなどでも代用可能です。



⑩かきベラ

削りの作業に用います。高台づくりや表面の成形に便利です。



⑪弓

ワイヤーが弓のように張られた道具。粘土を切るのに使います。主に、器の口の高さを揃える際に使います。

⑫こて

粘土をならすのに使います。こてのカーブを活かし、作品に丸みをつけることができます。サイズは作品の大きさや目的に応じて選びましょう。

あると便利なオススメアイテムは？

身近なものを応用してもよいでしょう。



【アクリル絵の具】

絵付けには発色のよいアクリル絵の具がオススメ。コート剤を塗っても流れません。筆は、陶芸用か水彩用の筆先がやわらかいものを使用しましょう。



【はんこ各種】

印花に使用するはんこは、文房具コーナーで市販されているものでも、手作りのものでも大丈夫です。ゴムが硬いものの方が押しやすいようです。いろいろ試してみましょう。



【手ロクロ】

卓上で取り回せる手ごろなサイズの手ロクロがあると作業効率がぐんとアップします。サイズはいろいろありますが、初心者は直径20センチくらいのもので扱いやすいと思います。



【電動ロクロ】

陶芸の世界に足を踏み入れたら一度は使ってみたい電動ロクロ。最近では家庭用の卓上サイズのロクロも販売されています。手びねりに慣れたら購入を考えてみても。

オープン陶芸の基本プロセス

成形の前に土を練る作業がないのが、オープン陶芸の特徴です。



成形



乾燥



装飾



焼成



再焼成

成形

手びねりのいろいろ

初心者の方は、まず手びねりで粘土と親しみましょう。

手びねりとは、丸めた粘土を指先で好きな形に作りあげていく技法です。粘土遊び感覚で誰にでも気軽に楽しめます。以下の技法を覚えておくと成形のバリエーションが増えますよ。



【玉作り】

粘土を玉形に丸めた状態に、指を差し込んで穴をあけ、次第に全体の形を整えていく技法。ぐい呑みから抹茶碗位の大きさの物づくりに適しています。



【ひも作り】

粘土をひも状にしたものを積み上げて成形する技法。自由な形を作れる面白さと、簡単に大小様々な作品が作れる応用性に優れています。



【タタラ作り】

タタラ板を使って板状にした粘土を使って成形する技法。厚みを均一にできるので、作品の印象がスッキリとしたものになる。同じ作品をいくつもつくりたい時にも便利です。

【くり抜き】

粘土で好きな形をつくってから、中をくり抜き、容器や箱ものを仕立てる技法です。

ロクロ成形とは？

オープン陶土も、憧れの電動ロクロで成形することができます！



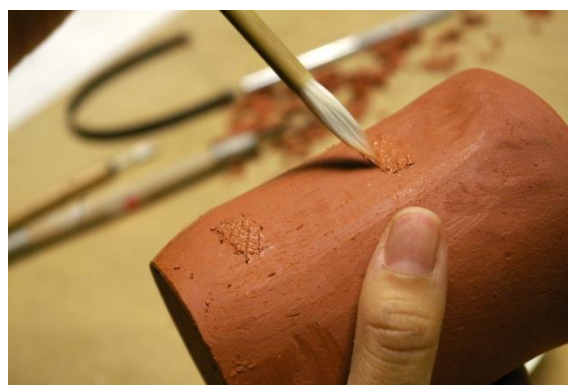
電動ロクロを使って行うロクロ成形。なかなかコツがいる技法ですが、本陶芸にステップアップする際にはぜひ身につけたいものですね。

慣れてしまうと、大きな作品はもちろん、素早く同じ形の作品をいくつも作ることができるようになりますよ。

オープン陶芸では、ロクロ用に開発された「オープン陶土・ろくろ」を使用すると作業がしやすいようです。

成形に使う「ドベ」とは？

粘土をマヨネーズ状にしたものを指します。



「ドベ」は粘土に水を加え、マヨネーズ状に練ったものを言います。粘土を貼り合わせるときや、パーツを接着するとき、接着剤として使用します。作品づくりの際に余った粘土でドベを作っておくと便利。

乾燥

乾燥の注意点

全体を均一に乾燥させるよう心がけましょう。

【乾燥の基本】

期間：4日～1週間

場所：風通しのよい場所・室内可

※季節や天候によって異なります。

粘土の色が白っぽくなってくれば乾燥の合図。
表面を手で触れた際に湿気を感じなければ乾燥していると言えるでしょう。

■作品全体をムラなく十分に乾燥させます。

乾燥中はほったらかしにせずこまめにチェックを。均等に乾くように作品をひっくり返したり置く位置を入れ替えたりすることも必要です。

作品の部分ごとに乾燥の進行具合が違くと、ひび割れの原因になりかねません。乾燥が早く進んでいる部分にはビニールを被せるなどしてペースを調節しましょう。

■ヒビ割れを防ぐには？

直射日光のもとで急乾燥させるとヒビの元。はじめは陰干しを。室内でも乾燥させることができますが、エアコンの風が一方向からずっと当たっているというような事がないように気をつけてください。

装飾

装飾のいろいろ

本陶芸にも用いられる技法です。基本を覚えて応用してください。



【刷毛目】

化粧土を刷毛で塗る際に、わざと均一ではなく刷毛の跡が残るようにしてニュアンスを出す技法。器を手で持って刷毛がけしてもよいですし、ロクロの上で行ってもよいです。



【しのぎ】

ハリやカンナで模様をつける事をいいます。道具を変えることによって、様々な模様を表現できます。粘土が半乾きの状態で行うと、するりと削ることができるはず。



【搔き落とし】

タタラ板を使って板状にした粘土を使って成形する技法。厚みを均一にできるので、作品の印象がスッキリとしたものになる。同じ作品をいくつも作りたいたときにも便利です。



【練り込み】

色の違う粘土同士を組み合わせる技法。マーブル状に混ぜ込む方法と、タタラをつくって粘土を重ね合わせる手法も。金太郎飴のように同じものをいくつも作る事ができます。

序章 陶芸 基礎の基礎



【象嵌】

模様を削り出し、へこんだところに色の違う化粧土を埋め、削りならず技法。印花と組み合わせるのもオススメです。埋め込みを色の違う粘土で行う方法もあります。



【印花】

表面に判を押して模様をつけていきます。使用するはんこは陶芸用のものに限らず、身近にある様々なものを使ってみましょう。粘土が半乾きの状態になったら押すのが基本です。



【彩色】

藍やアクリル絵の具を使って色をつけていくことを言います。

その他にも……

- 麻やかやなどの布地を粘土に押しあてて質感を加えたり
- 落ち葉を押しつけて模様を楽しんだり
- 製菓用の型で抜いてみたり……

気軽にできるオープン陶土だからこそ、
いろんなアレンジに挑戦したくなりますね！



焼成

焼成の基本

温度や時間に気をつけながら丁寧に焼き上げましょう。

【焼成の基本】

温度：160～180℃

時間：目安として20～50分

※作品の大きさや厚みによって異なります。

必ずオーブンの天板にアルミホイルを引き、
その上に作品を置いてください。



■作品は完全に乾いていますか？

生乾きの状態だときちんと焼き上がりません。十分乾燥させてから焼成の工程に移りましょう。

多機能オーブンレンジの場合、必ずオープンモードを選択し、温度と時間を手入力してください。

■ 綺麗に焼き上げるコツは？

- 低めの温度から焼き始めると失敗が少ないようです。様子を見ながら温度調節を。
- 部分的に薄い箇所は、アルミホイルでカバーをするなどして均一に焼き上がるように工夫しましょう。
- 作品が密集していると焼きムラの原因になります。一度に焼く量はあまり多くせず、スペースに余裕を持たせてください。
- 途中で一度、作品の向きや置く場所を変えると均一に焼き上がります。尚その際はヤケドに十分注意しましょう。
- 焼きが進むと作品の色が濃くなってきます。さらに進行すると焦げますので注意しましょう。

再焼成

食器として使用する作品にはコーティングが必要

コート剤を塗ってから再び焼成を行えば完成です。



コート剤Yu～は、焼成後完全に冷めてから塗布します。刷毛や筆で塗る方法の他に、花瓶などには直接注ぎ入れて全体に行きわたらせ、不要分をまた戻すというやり方を用います。

コート剤Yu～塗布後、Yuが完全に乾いたら**オーブン100～120℃で15～30分ほど加熱**し、いよいよ出来上がりです。

オープン陶芸をするにあたっての注意点

以下を守って安全にオープン陶芸を楽しみましょう。

■オープンには、必ず温度調節機能のあるものを使い、160～180度を守ります。

温度設定ができないオープン、オーブントースター、電子レンジ、スチームオーブンは使用できません。またオープンレンジのオートメニューは使用せずに、オープン機能を選択した上で、必ず温度と時間を設定してください。

■焼成中は必ず換気を行ってください。

焼成中は独特の匂いがすることがありますが、室内やオープン内の換気を行うことですぐに気にならなくなります。

■オープンの内部で、上部ヒーターから5センチ以上作品を離すことができるように大きさや置き方に注意してください。

成形時にあらかじめ作品のサイズを確認しておきましょう。せっかく出来上がったのにオープンに入らないのでは残念です。

■オープンにたくさん詰め込みすぎると焼きムラを起こす原因になります。適度な余裕を持たせましょう。

天板に作品をいくつも並べてしまうと、熱の伝わりが悪くなったり、焼成途中での配置替えがしづらくなります。ある程度スペースをあけておきましょう。

■焼成中はオープンのそばから離れないようにしましょう。

慣れてきても、焼成中はオープンのそばで待機してください。くれぐれも途中で外出はしないでくださいね。

オープン陶芸作品を使うにあたっての注意点

せっかくの作品です。大事に長く使いましょう。

■ 作品の扱い方

無理な負荷をかけると破損してしまうので気をつけてください。

作品を長時間水につけるのはタブーです。

電子レンジ・直火での使用はできません。

■ 作品の洗い方

○コート剤Yu~を塗ってあるもの

柔らかいスポンジで洗剤を泡立ててからやさしくなでるように洗ってください。

たわしや金たわし、固いスポンジは使用しないでください。

○コート剤Yu~を塗っていないもの

基本的に洗剤洗いはできません。

固く絞った濡れふきんで表面を拭いてください。

■ 作品の保管

直射日光を避けた場所で保管されることをオススメします。

安定のよい場所で保管してください。重ね過ぎに注意です。



本講座をどのように使われたら長く楽しんで続けられますか？

技法を応用してアレンジを楽しみましょう。

本書ではレッスン1から10までの作品づくりを通じて、様々な基礎テクニックを学べるようになっていきます。最初はテキストとDVDを見ながら、各章のお手本作品に挑戦してみてください。一通りマスターすると、今度はご自分なりのデザインを楽しみたくなることでしょう。そのとき、各レッスンでご紹介する技法を組み合わせしてみてください。オリジナルデザインのアイデアも生まれやすくなるはずです。粘土の色、成形の仕方、装飾方法をいろいろ組み合わせることでバリエーションは無限に広がります。

また、本書に登場する技法はすべて、本陶芸に活かせるものばかりです。オープン陶芸を通じて、もっと本格的な陶芸にも挑戦してみたい！と思ったとき、すんなりと移行できるように配慮しています。

土に親しむつもりで、まずはオープン陶芸を思う存分楽しんでくださいね！

